

児童文学において主人公の体験がもつ心理療法的意味に関する研究

- Robinson, J.G. 著 『思い出のマーニー』からの一考察 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
大橋 佳奈

児童文学は予てよりセラピストにとって深い課題を提供する一素材である。児童文学によってセラピストが素養を磨くことを薦めた、先駆者である河合隼雄(1996)は「本を『読む』ときに、私は自分が心理療法をするのと同じことをしている」と述べている。先行研究では主に、ユング派によって物語が解釈されている。これらより、児童文学には人間の本质が描かれていると示唆されるが、何故それほどまでに先人達は児童文学に心理療法の真髄が見えると主張するのであろうか。また先に挙げた河合の主張の真意とは一体どのようなものか。筆者は児童文学を通じて人間理解を深め、そして今後幾度となく人が生を問う場面に出会うセラピストとして、そこに描かれる心の深層を明らかにしたい。

本論は児童文学と心理療法の共通点を探る試行的研究と位置付けたい。ここで筆者は心理療法にまつわる重要な課題を提供する秀作の1つである Robinson 著作の『思い出のマーニー』を題材にする。そしてその物語において、世界に馴染めない主人公がどのように生き、そこでは如何なる体験が生まれ、主人公の中で一体何が起きているのか、さらにその主人公の体験と心理療法との共通点とはどのようなものかを考察している。

まず第2章では、内的探索の観点から主人公の体験を物語に沿って分析している。ここでは主人公が自分自身の問題に取り組める場にて、主人公にとって重要な想像の人物を生み出し、そして自分にとって重要な決定的場面を創造していることを明らかにした。それは結果として、ここでは1つの物語を生み出すことになり、歴史を振り返りながら自己の物語を再編集するという過程、つまり自己変容の過程が見られた。

続いて第3章では、自己変容の観点から主人公の体験変化を追って分析している。ここでは、主人公の抱えている問題 対象喪失、現実感の乏しさ、対人関係の未熟さ、母の不在、空虚感 を取り上げて、如何に主人公がこれらの問題と取り組み、解決していくのかを詳しく論じた上で、心理療法的にはそこで何が起きているのかを明らかにした。

以上の論考の結果、児童文学をよむときに登場人物の体験や体験している世界、そこで生じている現象を細やかに見た上で読み手がイメージする姿勢は、心理療法におけるセラピストの姿勢と通じるものであることが示唆された。

心理療法においてクライアントがセラピストを使用して内的世界で遊び、自己の創造力を育むように、読み手は児童文学を通じて登場人物の体験を想像の中で自分の体験として存分に味わうのである。このようなある物語を読み進めていくその過程に、児童文学と心理療法との共通点を見ることが出来る。すなわち、その姿勢は心理療法においてセラピストが自分の身体感覚を通じて、クライアントの体験を落とし込む姿と重なるのである。結論として、児童文学はセラピストの経験を培う絶好の素材であることが明らかになった。